
ARMORED CORE with Reinforce

えーさく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMORED CORE With Reinforce

【コード】

N0926X

【作者名】

えーさく

【あらすじ】

国家解体戦争、リンクス戦争より十数年後。faの数年前から始まる物語り。

chapter 00 (前書き)

やっしまったのですよ。

「ミッションを説明する。依頼主はいつものG A。目標は旧G A E領のG A E秘密研究所跡地だ。やつこさんらが壊滅してから引き払われたらしいんだが、最近になって人の出入りが確認され、研究所周囲から微量だがコジマ粒子の反応も見つかった。地下でなにかやっているのかもしれないな。それに起因するんだろつが、弾薬費はG A側で負担してくれる。つまり好き勝手撃ちまくってこいつてやつだ。…こんなところか。怪しさ満点だが、報酬も高い。やるか？連絡を待つてる」

自宅の端末に届いたミッションのメール。

私はそれを読み終わると、カーソルを受諾に置き、クリック、返信する。

拠点攻略は久しぶりだ。しかも旧G A E。
ナニが出るかわからない。

国家解体戦争、リンクス戦争から十数年。

私がG A子飼いのリンクスになってからまだ数ヶ月。

普通ならこういう任務はより高いカレードランクの人間に回っていく。しかし、私という突飛な存在が、ランク以上の仕事を回していく。

私は元々普通の社会人一年生だった。

上司や先輩にペコペコ頭を下げる毎日。

休日は寝倒すか、ゲームをやって1日を終えていた。

しかし、主観時間から、今から半年前に、気づいたら女の娘になっていた。

蒼い髪と深い青い瞳をした美少女にだ。

最初はテンパリそうだったが、それすら許されない扱いを、私は受けた。

機械に繋がれて、文字通り頭や身体をいじられる地獄の日々だ。首の後ろに何かを刺されたかと思ったら、強烈な吐き気が襲うわ、訳も分からず目に見える景色がコロコロ変わるわで散々だった。もし助け出されるのがもう少し遅かったら、私もお役御免、お陀仏バイバイはいそれまでよー。だったかもしれない。

救出された時の感覚なんてわからなかった。死に体のように、意識だけが動いてなかったからだ。

救助したのはG AとB F Fの混成部隊。ご丁寧にネクストA Cが2機もお付きだ。しかし、いくら拠点攻略とはいっても、ローディ先生とワ力は火力過多な気がする。よく爆死しなかったと本気で思った。

救助されてから、私はG A社の医療病院で1ヶ月横になっていた。話し相手は看護師さんや、何故かローディ先生やワカさんが時々来て話し相手をしてくれた。

まあ、本人達から名前を聞いて、初めて自分がA C 4の世界にT S 憑依をしたんだらうと結論づけた。

なにせ私は男であり、10年以上レイヴン、イレギュラー、ドミナントとして戦い、つい半年前にリンクスになったばかりだからだ。しかしそれは画面向こうのゲームの話。だがこれが今の私の現実であるのを、あの地獄がイヤというほど証明してくれた。

ようやく死に体の身体が言うことを利くようになってから、私は看護師にA M S適性について質問した。

あそこまで弄り倒されたんだ。ナニかあっても不思議じゃない。

看護師から告げられたのは、私が旧G A E社の秘密研究所から救出されたこと、A M S適性は中の下つまり平凡。身体は人並み外れた身体能力はあるが、A M S適性については普通。

超弩級巨大兵器A F - アームズフォート - が登場して久しい今日、ネクストA Cは絶対強者という立場を後退しつつある。

ネクストはただでさえコジマ粒子による汚染があるが、A Fはその危険性は皆無であり、リンクスになれるのが1000人に1人に対し、A Fは代替可能な凡人によって安定的に運用、量産出来る為、さらに平均的なネクストよりも戦闘力は上の為、企業はネクストよりもA Fの開発、量産に力を入れている。リンクス戦争から十数年経つ今も、あまり新型が出回らないのも、そこに一因があるのかもされない。

余計なことを語ったが、粗製よりはマシ、ということ、私にネクストACを与える用意があるとのこと。

私はそれを快諾した。

金を貰って人殺しをするのは、正直やりたくはない。けれどこの世界で、今の立場で生き残って行くには、リンクスになるぐらいしか道はない。首の後ろにAMSの接続部があってAMS適性もあり、さらにリンクスの質に恵まれないGA社からしたら、少しでも長く多く頻繁に使えるリンクスは喉から手が出る程欲しいんだろう。でなければこんな話しは上がらない。断ればお払い箱の道しか見えない。長い物には巻かれるのである。

機体は私の射撃能力と機動戦能力を考慮して、BFFの047ANを渡された。

しかし防御力に不安があったりする為、射撃能力を犠牲に、頭を社長、腕をGAN01-SSS-ALに換装。063ANが出るまではこれで我慢。武装は右腕にBFFライフルの051ANNR、左腕にGAのバズーカ、右肩に有澤グレのOGOTO、左肩に高速ミサイルを装備している。

本来なら、右肩には初期ミサイルが載る予定だったが、火力不足だと、ワカさんが予備のOGOTOを譲ってくれた。しかも重量過多を誤魔化す為に、FRSメモリまでも譲ってくれた。嬉しさ感謝から、そのままグレネード談議に移ったのは言うまでもない。10年以上グレネードを、たとえ使う場面が限るうとも、重量がかさむともグレネードを載せ続けた私だ。唯一ジナイダとエヴァンジエ相手には外したくらいしか記憶にない。そんな私にグレネードを語らせたら止まるはずがない。

故にワカさんとはかなり仲良くはなれたのだが。社長頭もその時貰った。

「リンクス、まもなく降下ポイントです」

「了解」

つい過去を思い出していたら仕事の時間だ。

機体を立ち上げ、各種モニターを確認する。本来なら、AMSの恩恵を受けて、高解像度網膜投影システムが使えるが、AMS適性が平凡の私では、それすらかなりの負荷がかかる。正直頭をシエイクされて胃の中身をぶちまけたいほどの吐き気が襲う。

7

平凡でこれだ。粗製と言われるローディ先生はもつとヒドいだろう。故に私は考えた。確かアナトリアの傭兵もAMS適性はそんなには高くはなかったと記憶している。それで2つの企業を壊滅させ、リンクス戦争を終結させたその強さの秘訣の研究をした。

彼は元レイヴン。ドミナントであったかもしれない。しかしそれだけでネクストACをトップクラス並に操れるなら、日々カラードラリンクは変わり変わりのてんやわんやだ。

幸いに、GA社はアナトリアを支援していた為に、アナトリアの傭兵の戦闘記録がいくつかあった。

私は他のリンクスとレイヴンの動きの違いを見いだした。

リンクスはAMSで機体を動かす。身体を機体と接続、機体を自分の身体として扱う。自身の反応がダイレクトに機体に反映される為、その機動はとても自然的且つ時々人間ぽい挙動もある。

しかし、レイヴンの機体だけは不自然に見える部分がいくつかあった。

動きが機械的に見える時があるのだ。

そこに至って、私は一つの可能性を見いだした。

ネクストACの操縦系統にノーマルの物を取り入れ、機体の駆動をAMSではなくマニュアルで行い、負担を軽減するという方法だった。

しかし、これにはいくつか壁があった。

まず第一の壁はGだ。

ネクストACはAMSの恩恵であまり操縦桿を使う機会がない。あとすれば引き金を引いたりするくらい。

故にネクストのコックピットは対Gジェルに満たされ、クイックブーストやオーバード・ブースト時の殺人的な加速Gを軽減、というかほぼ無力化している。

しかし、マニュアル操縦にするには、ひっきりなしに操縦桿を操る必要がある、対Gジェルが邪魔なのだ。

故に私は新しい対Gスーツを作る事にした。とはいっても、殺人的

加速Gに耐える設計をしたら、某黒き王子様なガチガチの鎧風な対G装備になってしまったが。

まあ、私の身長も低いから、Gの影響が大人より軽く、その程度で済んでいる。もし身長が150cmオーバーだったら、我慢してAMSで機体を動かすことになっていただろう。ちなみに私の身長は132cm。

ちっさいな……………（泣）

まあ、とにもかくにも、この対G装備はパワーアシスト機能もある為、殺人的加速Gの中でも、思い通りに機体を動かせるのだ。

これのおかげで、AMSは機体の出力調整とレーダー機能ぐらいにしか使うことがないため、負担を87%約90%の軽減に成功した。メインがAMS、マニュアルはあくまでも補助の域を出ない。それがネクストの操縦系統だが、それを私はひっくり返しただけでこれだけの効果が得られたのは驚きだ。何故にやらなかった？

だがしかし、身長制限がつく為、未だに私しか使えないという欠点があり。将来的にはもう少し身長制限をどうにかしたい。要研究である。

ほんと、ワカさんと仲良くなれて良かった。そうでなければ私1人ではこんなこと出来なかったし、有澤重工が研究に協力してくれたからこそ出来た対G装備なのだから。

「目標地点に到着。これより地上に投下します」

「了解。ロックボルト解除、ドッキングアウト。リインフォース、エヴァンジェ、出る！」

大型輸送ヘリから投下される私のネクストAC エヴァンジェ。

この身体がリインフォース？そっくりだった為、自らの名をリインフォースとし、祝福の風に相応しい、祝音の名をつけた。

「落下点クリア。地表まで約1200、メインブースター点火」

祝福の風が鈴の音を鳴らしながら、荒廃した大地に降り立った。

chapter 00 (後書き)

さて、第一回。お試的な回でしたが、いかがでしたか？

アナトリアの傭兵辺りに関しては独自解釈が濃いです。しかしこれはちょっと必要なことだったりしますので、目を瞑ってください。

ちなみにこのリインは、ナニカサレテしまったのと、こういうシリアル系な世界の為、外見はリイン？内面が初代リインちっくです。しかし、親しい人にはリイン？全開だったり……

今回は大まかなアセンでしたが、次回辺りから細かなアセンを掲載しようと思います。

意見や感想は随時受け付けますが、誹謗中傷は止めてください。作者は心がポツキリ逝きやすいので。

諸君、ドミナントとの約束だ！

装備と文に若干の修正を加えました。

chapter 01 (前書き)

いよいよミッション開始だ。諸君、派手に行こう。

ミッションエリアは入り組み、険しい断崖の入江と周囲は半砂漠化
していて、隠れる場所はない。

レーダーに映る赤い点。エネミーマーカ―に向けて機体を向け、最
大望遠。遠くにだが、戦闘車両とMTが見える。

未だ射程外だが、向こうからも此方が降下したのは見えただろうし、
戦闘車両なら広域レーダーで此方を捉えているだろう。

「…往くか」

操縦桿を握る力を強くし、OB-オーバードブースト-を起動。
独特の収束音を上げ、機体がコジマ粒子と推進剤を練り上げる。

「くっ」

ボンツ、又はバヒュウツ、という炸裂音を装甲越しに聞きながら、
Gに耐える。

QB-クイックブースト-レベルのGであればほぼ対G装備が無力
化してくれるのだが、やはりOBの初期加速Gだけは身体で耐えな
ければならない。

時速1100km/hという驚異的スピードで突撃する。が、これでも一番遅い方だ。積んでいるOBがOBだからな。

「ネクストだと！？どこの機体だ！」

機体が敵の無線を傍受し、それを聞きながら行く。この無線傍受でからも、十分に状況を把握することが出来る。

「本部に連絡！スクランブルだ！ノーマルをまわせ！！」

「すまないが、こちらも仕事だ」

背中のOGOTOを起動。戦闘車両に向けて撃つ。同時にOB終了、コジマ粒子再充填、PA展開率約30%。

グレネードは戦闘車両に着弾。燃料やおそらくミサイルにでも引火したのか、盛大な火柱をあげ、MTも巻き込み、大爆発を起こした。罪悪感はどうの昔に薄れている。たった数ヶ月のリンクス生活だが、それだけで私は何百もの人間を殺している。レイヴンやリンクスは、命を仕事として割り切らなければやっていられないのをこの数ヶ月で学んだ。でなければ自分が撃たれて死ぬ。私は死にたくないし、死ぬときは自分の納得のいく死。たとえば同じリンクスに敗れた時点で十分だと思っている。

地球を汚染し、人を沢山殺しているのだから、死ぬときは奪った命に見合う死に方をしたい。

「だから今は死ねない」

ミサイルと連動ミサイルを起動。照準はFCS任せでマルチロック。

「ファイア!!」

前方へQBしながらミサイルを撃つ。十数発のミサイルが、残っていたMTに降り注ぎ、爆散する。

「熱源多数接近、敵ノーマル部隊です」

「レーダーには映って」

その時、砂山の一部がせり上がり、出入り口のようなものが現れた。

「地下からです!」

「見えている」

ノーマルAC部隊。旧GAEだからか、GAの標準ノーマルACが3機4個小隊ほど出てくるが、中には妙に新品同様の機体もある。横流しでもされているのか?

「コジマ粒子反応増大。地下基地への出入り口のようです」

出口から出て来た敵ノーマルは12機。全機ミサイルやバズーカで此方を狙ってくる。

フットペダルを踏み込み上昇。ミサイルは機体を振って着弾ギリギリで回避する。何発かがPAを掠めるが、問題ない。機体にならなければいいのだから。

もう一度ミサイルのマルチロックで攻撃。GA製の為、ノーマルでも固い。しかし狙いはミサイルの爆風で視界を遮ることだ。

グレネードを向かって左のノーマル部隊に打ち込み、肩武器から、両腕にあるライフルとバズーカを起動。

片方はバズーカを撃ち込み吹き飛ばし、片方はライフルで蜂の巣に変える。

「敵ノーマル部隊の撃破を確認。増援も認められません」

「了解。これより敵地下施設に侵入する」

マップにマーキングした位置。先ほどノーマル部隊が出て来た位置に、上空からグレネードを撃つ。一発、直撃。しかし砂に邪魔されたからか、穴は空かず。

バズーカ発射、直撃。進入路確保。

「これより侵入を開始する」

「了解」

上空から接近し、空けた穴から侵入する。

そこは斜め下への傾斜。メインブースター点火、ホバーリングで前進開始。

「前方、熱源多数」

行き止まりのゲートの向こうには、レーダーで見える限りでも確実に待ち構えている陣形の熱源反応。

武器は肩のグレネードとバズーカをそのままにしておく。

「ゲート開放と同時にOBで侵入、強襲する。タイミングは任せる」

「了解。ゲートシステムへハッキング、ゲート開放10前」

機体に前傾姿勢を取らせる。

「9…8…7…6…5…4…3」

OB起動。PA減衰。展開率75%

「…2…1」

歯を食いしばり、Gに備える。

ゲートがゆっくり開いていき、わずかな隙間からノーマルがこちらを狙っているのが見えた。

「0!」

「くっ」

ゲート開放と同時にOBプラス、メインブースター点火、すぐにOB終了。

慣性に任せながら上昇し、敵部隊の真上を取る。

大多数がゲートに向けて一瞬遅い一斉射撃を加えたが、そこに私は居ない。何機かのノーマルが辺りを見回すような動作をしていた。つまり私が動いたのを見ていた証拠。しかし、私は上だ。

扇状に狭い感覚でゲートを包囲している敵部隊。確かに火力の一点集中に長けた陣形で誤射することもないが、特定のパーツをつけたネクストには、いい力モだ。

ズシンと敵部隊の中央に降り立つエヴァンジェ。

攻撃しなかった数機のノーマルがバズーカを向けてくるが、もう遅い。

「PA収束、反転。AA-アサルトアーマー-！」

PAが輝き、殺人的濃度のコジマ粒子を含んだ衝撃波が周囲を蹂躪し、コジマ爆発がすべてを無に帰した。

AA-アサルトアーマー-

コジマ技術による防護膜であるプライマルアーマー（PA）を攻撃に転用した技術。周囲を一掃する大爆発を引き起こすが、一時的にPAを展開できなくなる。爆発には敵からの攻撃を無効化する効果もある。いわゆるプチマップ兵器。

「敵部隊反応消失。次のフロアへ向かってください」

「了解」

右手奥にあった次のゲートを進む。

「3番ゲート、反応消失！」

「第7ブロックに増援まわせ！守りを固めろ！」

また無線を傍受したが、かなり慌てている様子だ。平和ボケでもしていたのだろうか？

「これは…ECM？」

オペレーターが言うまでもなく、レーダー機能に障害が起こり始めた。肩レーダー積んでくれれば良かった……。

「ッ、コジマ粒子反応増大！さらに大型の熱源反応も確認、クラスはAF級、注意してください！」

次のゲートを抜け、T時を勘に任せて右に行く。

またゲートをくぐる。

「…行き止まり？」

どうやら倉庫のようだ。

「物資の搬出急げ!!」

「この化け物がああああっ!!」

ロケットランチャーやマシンガンを撃ってくる人。しかしネクストのPAはノーマルの攻撃でもそこまで削れはしない。人が持てる火器でどうにかなるはずもない。

私は部屋の中心に機体を進めると、再びAAを使い、部屋を出た。

コジマ粒子の再充填とPAの再展開を待ち、機体を進めた。

「エリア38、交信途絶!」

「第7ブロック、全滅です!」

侵入を始めてまだ10分だが、基地中は大騒ぎらしい。

「ECM展開前のスキャン結果から、この先に大型熱源反応があるはず。注意してください」

「了解」

A F級の熱量ともなれば、自然と身に緊張感が走る。

ジヤイアント・キリング

その名の通り、A Fを攻略出来るリンクスをそう呼ぶ。

未だA Fが攻略された記録はない。しかも現実とゲームは違う上に必ずしも一致はしないだろう。まあ、とにかく避けて撃つだけだ。

ちなみにシミュレーションでS O M - スピリット・オブ・マザーウ
イル - 通称カーチャンと戦ってみたが、実際には戦いたくはない。

長距離砲撃もそうだが、一番脅威的なのがやはり近接防御のV L S
の弾幕だ。O Bで機体を高機動で揺らし、弾切れまで戦ったが、や
はり外装を普通に攻撃しても墜ちず、脚を一本折るので精一杯だっ
た。

シミュレーションとはいえ、生きた心地がしなかった。まあ、同じ
G Aグループだから戦うこともないだろう。それにあの弾幕を経験
すれば、大抵の弾幕が怖くなくなる。超平和ボケ大国に住んでいた
私には、実戦の恐怖を克服するいい練習にもなった。

閑話休題。

残弾確認。

包囲展開していた敵はほとんどA Aで片付けて、単体の敵はバズー

カとライフルで十分だった為、グレネードやミサイルはまだ余裕がある。

バズーカとグレネードを起動し、ゲートにアクセス。

ゲート開放と同時に前に進むが

「大規模コジマ反応！？避けて！！」

「ぐうっ！！」

O B 緊急発動、前方多段Q B。

一瞬にして1500km/hのスピードであえて前に出て避けた。
エヴァンジェの頭上を、緑色の閃光が過ぎ去り、背後で大爆発、P
Aが一気に減衰する。

「…ソルディオス……」

「ちっ、変態どもがつっ！！」

巨大な六脚の上に載る丸い球体。

リンクス戦争に置いて旧G A Eと旧アクアビットが開発した狂気の兵器。ただ稼働するだけでネクストの何十倍ものコジマ汚染を引き起こす存在とはいけない兵器。ある意味A Fの元祖。ソルディオ

ス。

強固な装甲はもとより、ネクストを超えるPAの防御力は、波大抵の火力では抜けない。

攻略法はゲーム的には2つ。

ソルディオスの下部にあるハッチを攻撃し、内部から破壊するか、コジマキャノンが放たれる前のチャージ時に砲口前のPAが消失する為、そこに向けてありつたけの火力を叩き込む。しかしタイミンがシビア。そして現実的にもう一つは、強引にPAを剥がしてとにかく撃ちまくるか。

幸いにして、ソルディオスのドックはそれなりの空間があり、最低限の機動はとれる。

「なるようにしかならないか」

「危険です！一度待避してください！！」

「却下だ。アレを上には上げられない」

グレネードとバズーカをマニュアル、ライフルとミサイルをFCSのオートロックに切り換える。

どのリンクスも、レイヴンすらしたことがないだろう全兵装一斉射撃。フルオープンアタック。

ソルディオスの砲口が、コジマ粒子の収束により怪しく光る。

「カモン…カモン……よしっ！」

カッと光るソルディオス。放たれたコジマキャノンを、メインブースター点火、上昇とバックブースト、後方QBの合わせて避ける。背面が壁にぶつかるが、一撃を叩き込めればそれでいい！！

「倍返しだああああーっ！！」

ミサイルが、バズーカが、ライフルが、グレネードが、ソルディオスの砲口に向けて放たれた。

コジマキャノンを使った直後だ。PAも薄いはず。

ミサイルがPAを剥がし、ライフルの弾丸が小さな弾痕を作り、そこにバズーカとグレネードが殺到する。

そしてソルディオス大爆発を引き起こし、粉々に吹き飛んだ。

「なんと他愛ない。鎧袖一触とはこのことか…」

余裕綽々に渋く呟いてみせたが、内心は今頃恐怖が襲ってきた。

コジマキャノンとは、たとえネクストだろうと喰らえば致命的だ。そんな奴を成り行きとはいえ、いきなり相手にしたのだ。08小隊長と悪夢の人には感謝だ。お陰で外面には冷静を保っていられる。

「……クス……リンクス……リンクス！応答してください！リンクス
！！」

「……こちらエヴァンジェ、リインフォースだ」

「リンクス！……良かった。無事なのですな」

「ああ、コジマ爆発でP Aが消し飛んだが、機体に支障はない」

オペレーターの安藤の声に答える。

しかし今日は彼女の意外な一面というか、始めて事務的な面以外の部分をくれた。

オペレーターはリンクスやレイヴンの世界以上に命を仕事と割り切らなければやっていられないと聞いたことがある。

確かにそうだ。

組んで1日で別れれば、数年続く場合もある。組んだ人間が生きている限りは続く関係だが、リンクス戦争からこの方大規模な企業間の衝突はないが、日々人は死ぬ。今日私も何人殺したかわからない。

そんな世界で、戦場で比較的安全な後方に居るオペレーターという

のは、かなり人の死を見るかもしれない役職だ。

彼女が何人の死を見たかわからないが、私がリンクスになって数ヶ月のパートナーが、やっと自分を見せてくれたのかと、不謹慎にも嬉しく思った。

爆風で壁際に押し付けられた機体を立ち上がらせる。

PAがコジマ爆発で消し飛んだところに範囲外だが小規模AAを喰らったような物だ。OGOTOの砲身とバズーカ、全面装甲が少々溶けているが、まだ使える。

その後、複数のブロックをまわったが、切り札たるソルディオスを失ったせいか、敵は戦意喪失で流れるに実質上の降伏宣言。

ミッションコンプリートだ。

chapter 01 (後書き)

いきなり変態兵器の登場だが、どうだろうか？感想を待っている。

旧GAEの秘密研究所の制圧を終了し、私は機体ごと輸送機で運ばれた。

輸送ヘリでないのは、機体にこびりついたコジマ粒子をGA本社のあるクレイドルに着く前に洗い流す為だ。

そして輸送機はクレイドルに収容され、機体を密閉格納庫に移し、さらに洗浄。

主機を落とし、コンデンサーの電力で自力歩行、機体を専用のハンガーに固定する。

コックピットブロックをイジェクトさせ、AMSとの接続を解除。

気怠い身体を押ししてコックピットブロックを離れ、バイザー着きヘルメットを脱ぐと、ダストボックスに胃の中身をぶちまけた。

「うえええ……ですう……けぶ」

フルオープンアタック時は身体の負荷がAMSでネクストを動かす時の同レベルの負荷がかかる。よって、フルオープンアタックを使った日には、AMSを解除すると、身体と機体の大きさのギャップと負担を受け入れられずにこっして必ず吐いてしまう。

「またアレをやったのか？随分と、自分をいじめるのが好きだな君は」

「ろ、ローディ…先生……」

声に顔を上げれば、そこには白い無精ひげを顎いっぱいに生やした初老のダンディーなおじ様。

G Aが誇る最強リンクスの一角、ローディ先生が居た。パイロットスーツ姿なのは、先生も依頼があつたのでしょうか？

「アスピナのひよっこ達の相手にな。それより君にしては手酷くやられたな。焼き加減から、レーザー系の類を喰らったか？」

私の機体具合を見て言うローディ先生。

「コジマ爆発を貰っちゃいまして……PAが消し飛んだところに爆風をモロに受けてしまって……」

私がそこまで言うと、ローディ先生は私の腕を掴み、引っ張り出した。

「あ、あのー！」

「今すぐ検査だ。医務室に行くぞ」

「あの一！コジマ汚染の心配はないのですよ」

「それでもだ。君は子どもで女性だ。ネクストを駆らせながら言うべきセリフではないが、将来何かあつてからでは遅いだろう？今出来るだけの精密検査を受けて来なさい」

「はあ〜いです」

私はローディ先生とワカさんには一生頭が上がらないのですよ。

ワカさんは言わずもがな、ネクスト関係で多大にお世話になり、ローディ先生にはリンクスとしてのいろはを教えてもらったのです。

そして精密検査を受けた結果、コジマ汚染の心配はないとのこと。しかし問題は機体の方。

前面装甲、バグブースターとバズーカ、OGOTOはコジマ爆発によって損傷の為、見積もり一週間は依頼を受けられません。しかしそれも仕方がないこと。なにせ私のエヴァンジェは047ANが母体である為、ブースター関連はローゼンタールやオーメルのパーツの為、取り寄せに時間がかかるのは致し方ない事実です。063ANの同士が待たれます。本来の私のエヴァンジェ（ゲーム内で）は、063ANと047ANの混合機なのです。だから早くHARDを共に駆けた機体を再現してあげたい。その為には、お金も貯めないとい。

生活費くらいなら問題はないのですが、如何せん、弾を消費する機

体ですから弾薬費もかさみ、なかなかどうして、お金の溜まりは悪いのですよ……。

あ、丁度良いですから、マシンガンとかないか聞いてみましょう。正直ガトリング系は重くて使いにくいんですね。収弾性もマシンガン系には今一歩劣りますし、あとブレードもですね。

chapter 02 (後書き)

インターバル的な回です。

063 ANの登場はまだ先になります。

機体アセンブル(前書き)

少し遅れましたが、ラインのネクスト、エヴァンジェのアセン表です。

機体アセンブル

エヴァンジェ

047ANベースネクスト

HEAD:KIRITUMI-H

CORE:047AN01

ARMS:GAN01-SS-AL

LEGS:047AN04

FCS:047AN05

GENERATOR:GAN01-SS-GL

MAIN BOOSTER:CB-HOGIRE

BACK BOOSTER:LB-HOGIRE

SIED BOOSTER:AB-HOGIRE

OVERED BOOSTER:KRB-JUDITH

RR ARM UNIT:051ANNR

L ARM UNIT:GAN01-SS-WBP

R BACK UNIT:OGOTO

L BACK UNIT:VERAMILLION01

SHOULDER UNIT:BELTCREEK03

主に拠点攻略と対MT、ノーマルAC戦を考慮したアセン。防御力と機動力のバランスを一応図っているが、やらないよりはマシ程度。操縦系をマニュアル重視に変えている分、操作性と対G関連に若干の不安があるが、平均的ネクストレベルの機動は問題はない。

ちなみに実際これで戦うと、ネクストAC戦ではカライドランク10まで行けるが、それ以上は無理。グリント相手には削り切れない。

てかグリントが早すぎて攻撃が中らない。ハリ相手でもギリギリである。レギユは1・20。1・00でも結構厳しい。HARD時は対ネクスト戦以外ならば結構頑張れるが、敵がエネルギー系の兵器を使う場合は要注意である。

色はメインが白、サブが黒、その他は灰色だが、カメラ部はオレンジであり、エンブレムは左斜めに傾いたシユベルトクロイツに黒い羽が生えている。

以上が今現在のリインのネクストの構成である。

カレード

それは企業連管轄下のリンクス管理機構。

リンクス戦争後、各企業が全てのリンクスの占有権を放棄し、共同管理する方針を取ったために生まれた組織である。しかし現在では企業連が形骸化がすすんでいることもあり、企業の意を受けたミッシヨン仲介ブローカーの溜まり場と化し、カレードランクの管理とオーダーマッチ主催以上の活動はほとんど行われていない。

リンクス戦争時、40機近くいたネクストであったが、同戦争時、その約半数が失われた。

それから十数年。各企業がリンクスの占有権を破棄したことで、以前よりは楽にリンクスとなれるようになったらしく、今やカレードに登録されているリンクスは200を数え、非登録のイレギュラーリンクスを合わせれば、300のリンクスとネクストが存在すると言われている。

その中でも特に実力の高い30番代より上のリンクスとネクストを、ランカーリンクスやランカーネクストと呼ぶ。ちなみに私はカレードランクNo.30。強くもなければ弱くもない。実に平均的なリンクスのランクである。

企業がようやくAFを量産を開始し、トールラスも起業がまだの今、A C f aにはまだ時間的に余裕はあるだろう。

問題は、その数年で私が生き残っているのか、そして生き残ったとしてどの程度のリンクスになれるのかが、生死の別れ道。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

side

「あの新人が…ソルディオスを墜とす…か」

「…あれはA Fの前身だ。その火力と防御力は今更説明するまでもないだろう」

「…これからは、A Fが企業の主力になる。無論、戦場で会敵する可能性は十分にある。だが戦い方次第で新人クラスでもA Fを撃破可能という概算がとれたと言うわけだ」

「…これもお前の差し金か？王小龍」

「さあ、どうだろうか…」

「…いずれにせよ、これで企業もおちおち上ばかりを見ているわけにはいなくなったわけだ。旧G A Eの研究所から見つかったイレギュラーリンクス。その能力、無視出来んな」

「珍しいな、オツツダルヴァ。いったいどういった風の吹き回しだ」

「別に。…ただ、躍動者に興味が向くのは自然だろう」

「…違いはない」

「ジャイアント・キリング……この巨大殺人者で、いったい何人のリンクスが増え減りするだろうか」

「ジャイアント・キリングか……」

「…ローゼンタールからいくつかパーツを送りたいとの要請があるが、構わないな。王小龍」

「好きにしる。今の奴はGAの子飼いだ、専属ではない。パーツの使用の制限は、実質あってなきものだから」

|||||

リイン side

機体の修理中は事実上のお休みの為、もう1機ネクストを組めるア
センブルとパーツがあれば良かったのですが、私はそこまでお金持
ちであるわけがないので、一週間程お休みです。

そんな訳で、私は旧日本へやって来ました。

旧日本には有澤重工がその本社を置き、主要企業が上空7000mへ上げた空中プラットフォーム、クレイドルへその居を移す中、有澤重工はあえて地に留まっていた。

一度ワカさんにそのことを訊いてみたんですけど、理由は2つ。

1つは、如何に国家解体戦争やリンクス戦争、そして現在に至るまでGA傘下にてネクスト火力の底上げを担うグレネードを生産し、タンク型ノーマルにも定評のある有澤重工と云えど、社員とその家族すべてをクレイドルに上げることは叶わず、それ故に地上に残った。ワカさんは私に語った。社員が居て企業は成り立つ。社員第一の有澤重工42代続く社訓らしいです。

そしてもう1つはかなり個人的なというか、有澤一族の俗っぽい理由。

「空に、温泉は涌かぬからな」

ワカさん、と言うより、有澤一族は大の温泉好きで、ワカさんも例に漏れず温泉が好き。

それ故か有澤重工社員も温泉好きが多く、クレイドルに移らずとも社員の反発はなかったそうです。

そんな大の温泉好きのワカさんから呼び出され、私は箱根のとある旅館へ招待されました。

リンクス戦争よりこっち、コジマ粒子によって汚染の続く世界で、日本は比較的汚染の影響は弱い。

それは日本が戦場になる事がなく、汚染原因は主に黄砂や雨であったかららしい。

そんな日本は今や、全世界レベルで清浄と言える国であり、有澤重工の本拠とあって、その経済もそれなりには潤っている。

コロニーでの養殖品だが、未だに生魚が高品質で食べられる数少ない土地でもある。この辺りは品質管理にうるさい日本のこだわりなのかもしれない。

私は10畳程の部屋で、ワカさんと2人きりで食事をしています。

お刺身なんてこっちに来てから初めて食べたのですよ。

私達は黙々と食事を取り続ける。

ワカさんも私も日本人故にか、食事は静かに食べる物。というのが、私達の間での暗黙の掟になっています。

「しゅちそうさまでした」

食事のあとの挨拶も忘れません。

食後の緑茶に手をつけながら、私は切り出しました。

「ワカさん。今日、私を喚ばれた理由を訊いてもよろしいですか？」

「む？…ああ、実は此度、43代目有澤社長を拝命した。正式な発表はまだ先のことだが、盟友には事前に伝えておこうと思った故に、本日の席を設けさせて貰った」

「そうでしたか…おめでとうございます。それとは知らずとはいえ、何も用意しませんで」

頭を下げる私を、ワカさんは手で制する。

「いや、別に畏まらずとも構わん。君には、あまり気を使って貰いたくはない。リンクスと企業の長、どちらにも、気を許せる友が少ない私には特にな」

どことなく陰りが射す隆文さん。

権謀術数が往来する企業の世界と、今日の友は明日の敵が日常の傭兵稼業の世界。そんな世界で気を許せる相手は少なすぎる。

私も、心から気を許せるのは、ワカさんとローディ先生ぐらいしか居ません。

「…わかりました。あ、それじゃあこれからなんと呼びすればいい

いのですか？」

「隆文。私の本名だ。こちらで構わない。若は、最早卒業だからな」

「大変ですね、一企業の社長さんも」

「ああ。だがこれで世界に我が有澤重工の技術力を存分に宣伝出来るだろう」

「ガチタンと有澤グレですね。わかります」

「やはり盟友はわかってくれるか。企業でも日夜人型とタンクの争論は激しいが、我ら有澤重工は、グレネードの浪漫の下に集った同志！」

「我ら産まれは違えども！その志を同じくとする者故、死する刻も同じ土下で眠ろう。……有澤重工の社訓第一箇条ですよ」

「その通りだ。そして君は有澤の希望でもある」

「それは言い過ぎな気がするのですよ」

「いや、大げさではない。破壊力と引き換えに重量がかさむグレネードを必ず装備して出る人物は、亡きベルリオーズ以来、君ぐらいだ。我が有澤では、君は女神も等しき者だ」

「…流石に恥ずかしいのですよ……」

私がグレネードを積むのは最早維持以外の何者ではなく、使用頻度

も、対拠点や固定物のみです。

「しかし流石に重量がかさむ我が有澤グレが、今やアルドラやアルゼブラの軽量グレにその市場を押しつぶさつつあるのも確かだ！」

「……確かに軽いですけど、火薬が少なくあまり吹き飛ばないんですよ。OGOTOに比べて」

「ふふん。我が有澤、国家解体戦争より築き上げしグレネード技術。ぽつと出の匹夫共に遅れはすまい。だが、それでも市場は軽い物を求める」

「その分のヘイロードを他に割けますからね」

私も昔は偶に軽いアルドラのグレを積む時もありましたが、現実の今は、047ANのパーツ構成から一部ローゼンタールやオーメルのパーツが混じるくらいで、武器やフレーム関係はGA製のしか回ってきませんし、有澤重工への恩義に、OGOTOは積み続けるとしてますし。

「そうだ。故に我々は新たなグレネードを開発した。その試用を君に願いたい。これは我が有澤重工からの依頼として受け取って欲しい」

「こつちが本用でしたか……」

「いや、これはついでだ。本用は先の通り、私の社長拝命の件だ」

嘘ではないでしょうね。古き清き日本人というか、若干武士成分が入っている隆文さんは、嘘を吐くのが苦手というか、実直なんですよね。

「わかりました。有澤にはお世話になっていますからね。その依頼、お引き受けしましょう」

「感謝する盟友よ。さて、食事も終わった。風呂と酒、どちらから行く？」

「お風呂で身体を温めてから、お酒にします。月は見えるのですか？」

「ああ。今宵は晴れた。良い月見酒を約束しよう」

「それは楽しみなのですよ」

私は立ち上がると、隆文さんに一礼して、部屋に着替えを取りに行つてから、浴場へ向かいました。

chapter 03 (後書き)

社長との一幕です。

有澤のフルフレームネクストにガンダムWEWのサーペントカスタムを採用しようと思うが、皆はどう思う？

理由は、サーペントがネクストっぽく見えるし、再現したら意外と行けたからだ。

この小説では有澤重工が目立つやも？

chapter 04 - 1 (前書き)

複数話構成で短いスパンでポンポンいこうと思います。

「ミッションを説明します。目標はアスピナコロニーに進撃中の旧アクアビット部隊です。旧アクアビットは旧GAEと合流し、新興企業トーラスを起業しましたが、彼等はそのトーラスにおいても追放された異端中の異端分子です。彼等がアスピナコロニーを襲撃する理由は不明ですが、アスピナコロニーはネクストに必要な不可欠なAMSの研究機関アスピナ機関も置かれており、次世代リンクスの養成所も置かれています。これを失うことは、各企業の望むところではありません。彼等を速やかに排除してください。敵戦力について細かな情報は不足していますが、遠距離望遠により、巨大兵器ソルディオスの機影が多数確認されています。留意してください。なお、複数のランカーネクストにも同様のミッションが与えられています。可能ならばこれと共同し、任務を遂行してください。社会の秩序を乱す彼等を、我々は見逃す事は出来ません。アスピナコロニー市民の命を守る為に、あなたの力を貸して頂きたい」

メールに届いたミッションメール。

送り主は企業連。

「大きな戦いになりそうですね」

受諾をクリックし、返信する。

企業連からのミッションともなれば無視は出来ない。私は独立傭兵ではないですから。

機体アセンも一部変更。右手のライフルをローゼンタールから送られたレーザーブレードに変える。

相手の数がわからない以上、最悪これ一本で戦う状況もあり得る。

ソルディオス相手なら、遠距離からバズーカとグレネードで攻め立てれば墜ちる。コジマ爆発を狙えばさらに良し。

「敵戦力規模が不明とは、企業連も雑な仕事をしますね。」

一番はやっぱり精密機器を扱うBFFと人情溢れる有澤重工からのミッションですね。

自宅のアパートを出て、エレベーターと徒歩でネクストガレージに向かう。

格納庫には現在GAに所属するネクストが置かれるが、現在常駐しているのはローディ先生のフィードバックと、私のエヴァンジェだけの寂しい格納庫なのです。時々隆文さんの車懸があったりするくらいです。

しかし今日の格納庫はとても騒がしく、整備士の人達があつちに行ったりこつちに行ったりごった返しているのですよ。

その理由は格納庫の状態。フィードバックとエヴァンジェの他にも

う1機のネクスト、タンク型で武器腕グレネードを装備し、背中にも2基グレネードを装備した全身グレネード装備のネクスト。有澤重工の雷電ですね。

その雷電を中心に整備士達がてんやわんやしているのです。

しかしそれだけならまだ少し混み合うぐらいで感じます。機体が変わったといっても同じタンク型。3機のネクストの整備は時々ここでもやってますからね。

ならどうしてか、それはもう1機ネクストが鎮座しているからでしょう。

重量四脚型で、背にスナイパーキャノンを装備したBFF系統パーツ構成のネクスト。

「ストリクス・クアドロ……」

まさか王小龍もここに？

現在出撃準備中の4機のネクスト。

現在のGAグループの全ネクストが出揃い出撃するなんてことはかなり異常すぎる。

相手がAF級を擁する戦力相手にネクスト4機は箇条過ぎる。

そしてこれは企業連のミッションともなれば、他企業のネクストも

出撃するはず。

保険なのか、それともそこまでして葬り去る何かがあるのか……。

「おや、ネクストに興味がおありかなお嬢さん」

声が出た後ろを振り向けば、ローディ先生以上に歳とわかる老人が1人。その雰囲気は老紳士のようなようだ。

「しかしここは危ないところだ。早く両親の下へ帰った方がいい。でないと怒られてしまうよ」

「……此処に居る理由から、私が何者なのか、あなたならおわかりかと存じますよ。王小龍さん」

「いや失敬。実に、戦場には似合わぬ可憐なお嬢さんだったのでね。ついおふぎけが過ぎてしまったようだ」

「確かに外側は戦場には向かないでしょうけど、心は一端の戦士のつもりです」

顔は老紳士なのに雰囲気は人を食ったようで、はっきり言って苦手です。この人。まあ、本人からしたら軽くからかっている感じなのでしょう。

「それで、ランカー上位の貴方が、出撃前にランカー最下の小娘に、

何かご用ですか？」

「まあ、ね。その通りだ。実は今回の任務での役割分担を君に話しておこうとね」

「役割分担……ですか？」

後に王小龍は語る。

GAの祝音の風の始まりは、正にこの時だったと。

chapter 04 - 1 (後書き)

ロリジジ……ゲフンゲフン!!

王小龍との邂逅はラインにナニをもたらすのか？

王小龍より言い渡された役割に、私はその言葉をオウム返しに返した。

「敵の中心を叩いて分断させる！？私だけでですか！！」

確認されているソルディオスは全部で10機。奇しくもAC4のHARDと同数。

だがゲームと現実が違う。

前回は閉鎖空間かつ1機だけだった為、なんとか出来たが、今回は複数であり、1人で10機のソルディオスを墜とす腕がないくらい、自分が一番良く知っている。

「君は今唯一AF級を落としたリンクスだ。正面戦力を失えば、あとは烏合の衆だ。このミッションはBFFから追加報酬も出す用意もある。引き受けてくれるね」

相手は実質的BFFの代表者。

BFF系パーツを使い、GAの保護下にある私には、断る事が出来はしない。

「有澤重工の雷電とアスピナからも援護が出る。これでどうかな？」

雷電が？

今の雷電は社長砲こそ載せていないが、代わりに両肩にOGOTOを載せている。面制圧役の雷電が援護してくれるなら、長距離砲撃でなんとか……

「わかりました。お引き受けしましょう」

「頼むぞ。ジャイアント・キリング」

王小龍は私の肩を軽く叩くと、去って行った。

やむを得ずとはいえど、ソルディオス10機を相手にする事になってしまうなんて。

「私はNoと言える日本人になりたいのですよ」

つと、まず無理な目標を呟き、ロッカーで着替えながらまたアセンをいじり、換装作業が進む愛機に乗り込み、OSの調整を始めた。

|||||

作戦領域では既に戦闘が開始されていた。

ソルディオスは複数のノーマルや戦闘車両は無論。ランカー外ネクストやランカーネクストに護衛されて移動していた。

まずはそれをソルディオスから引き剥がす為、2回の陽動が行われた。

東と北から長距離ミサイルと砲撃による目眩ましの後。上位ランカーネクスト（WGと活動時間が短いハリを除く）による敵ネクストとノーマル部隊をソルディオスから引き剥がすこと。

私達はアスピナコロニーから直接進軍し、北側からソルディオスを叩く3段階構えの作戦だ。

普通なら10機ものネクストが居ればソルディオスを墜とせるものだが、ソルディオス開発から10年経つ今日。ソルディオスのPAが当時のデータの倍を示し、コジマキャノンの発射サイクルも早くなっている。

しかもソルディオスだけでなく、ネクストやノーマルを相手しながらでは辛く、しかもソルディオス本体に防衛火器のレーザー砲以外にVLSも確認されている。

ミサイルなら別に怖くはないが、ミサイルの中にコジマミサイルや核ミサも積まれているらしく、これに何機かこちらのネクストが喰

われている。

恐らくこのmission後に行われるカロードランクの整理によって、faのカロードランクが出来上がるだろう。

つまり死ぬ可能性が高いが、生き残ればある程度の生活は約束されるということだ。

一応GAの保護下にある私だが、確たる居場所を確保しているわけではなく、宙ぶらりんの存在だ。

だからこのmissionで少しでも自分の利用価値を企業に示しておかなければならない。

最悪、トーラスに身柄引き渡しが無いわけがないとも限らない。しかし私は今のポジションがいい。

企業に近いわけでも遠いわけでもなく、ローディ先生や隆文さんとの交流を持てている今の日常が。

「だから失敗は許されん」

操縦桿を握る手が強くなる。

場所はアスピナコロニーの格納庫。

タイムスケジュール通り事が進んでいるのならば、そろそろ出撃だ。

「リンクス、時間です。発進どうぞ」

「感謝する。リインフォース、エヴァンジェエ出る！」

chapter 04 - 2 (後書き)

次回！ネクスト3機VSナニカサレタソルディオス

恐ろしきはコジマパワー〜。

ブーストで格納庫から躍り出るエヴァンジェ。

しかしいつもとは武装が異なる。

左手のバズーカはBFFの047ANNRに替えている。

だが、一番目立つのは背中だ。

左側に光学カメラとレドームを装備し、右側に折り畳まれた巨大な砲身。

両背中スロットを消費して装備する有澤重工の試作重グレネード。

ちゃんとした名前がまだないことと、砲身の形から、フォールディングFソリッドカノンと呼んでいる。

このFソリッドカノンは、軽量、軽負担を求める市場に真っ向から喧嘩を売る重量グレネードであり、両スロット消費はガチタン社長砲ヒヤッハーなりリンクスでなければそれ程積む機会はないだろうが、その脅威の大艦巨砲主義を更に強化したコレの攻撃力とPA貫通能力、射程距離は、現行武装でもトップクラスである。

つまり社長砲と重砂砲をかけてみました

なグレネードであり、開発にBFFの技術陣も関わっていることから、冗談にも思えない。しかも弾数が30発と地味にOGOTOより多い。

「有澤重工、雷電だ。今回は後援にまわらせてもらう。コジマは拙いのでな」

後方から雷電が接近してくる。

FソリッドカノンではなくOGOTO2積みなのは、総火力を補う為だそう。両肩で48発のグレネードは確かに脅威だ。

そして雷電に遅れて出て来たのは、軽量二脚のネクスト。

あの構成は、武装こそ違えど旧ホワイト・グリント……

誰が乗っている。

「ネクスト、アステリズム、ジュリアス・エメリーだ。よろしく頼む。ランカーリンクス」

ちよ　！！

な、なぜORCAのNO.3が此処に居る!?

思いもしない人物の登場に、内心驚愕をするが、それを声や顔に出す程私は青いつもりはない。

後方から接近するアステリズムは、私のエヴァンジェに併走すると、肩に触れてきた。

「活躍は聞いている。頼りにしている。ジャイアント・キリング」

「…こちらこそ、よろしく頼む。ジョシユア・オブライエンの再来の実力、あてにしている」

「ランカーリンクスには劣るかもしれないが、前衛は務めてみせよう」

今日のエヴァンジェは積載量値ギリギリの武装の為、いつもの動きは出来なくはないが、手数に劣る。

前衛機ではなく中衛機だ。

それが本来の047ANの運用法なのだが、それはさて置き。Fソリッドカノンがかなり割りを喰っている上、こちらは重量寄りの中量機体。

彼女のアステリズムには追いつけない。

ジュリアス・エメリー

ORCA旅団所属のリンクスで、ORCAを立ち上げた最初の五人の一人。

アスピナ機関において、ジョシユア・オブライエンの再来と呼ばれ

たエリートリンクス。ORCA旅団では唯一の女性リンクスとなる。リンクス戦争末期にレイナードへと合流した。

ハズなのだが……何故アスピナの増援が彼女なのか？

いや、今考えても仕方がないな。腕は確かなのは、嫌でもわかる。私のようななんちゃってリンクスとは質が違う。

「目標、遠距離望遠で視認。支援砲撃を開始します。留意してください」

オペレーターが告げ、アスピナコロニーのロングレンジキャノンやVLSから長距離砲撃が始まる。

その様を、左肩に装備された照準用遠距離光学カメラが鮮明に映し出す。

距離にして12000mを狙い撃つ超射程のFソリッドカノンだ。その照準用カメラともなれば呆れる程優秀だ。

「5、4、3、2、1、着弾…今！」

ロングレンジキャノンの大口径砲弾や長距離ミサイルが轟音を上げて地面を穿つ。

戦闘車両やMT、ノーマルの混成部隊にはそれで十分だが、ソルデ

イオスには大して効いてはいなさそうだ。

出来て脚に直撃し、脚を破壊。歩みを鈍らせられたぐらいか。しかし進行速度が遅れる分、迎撃に時間が裂ける。

「盟友。指揮は任せる。私は其方向きにはあまり明るくないからな」

「有澤が任せるならば私にも言うべき事はない。指示をくれ」

いや、確かに私は部隊も指揮した迎撃も無きにしも非ずだが、場数なら圧倒的に隆文が、質なら圧倒的にジュリアス・エメリーが上である2人が何故私に指示を仰ぐか……良いのかそれで……。

「私達に部隊指揮は務まらない」

「指揮をする前に吹き飛ばすからな」

「指揮をする以前に、部隊規模で出撃した経験があまりないものだな」

至極わかり易い説明に感謝する。

「雷電、私と共に距離八千まで接近。長距離砲撃を仕掛ける。アステリズムは待機と共に全方位を警戒。狙撃の邪魔はされたくはないからな」

「了解した」

「アステリズム、了解」

ブリストで機体を進ませる。

長距離砲撃は続くが、未だに1機も落ちないソルディオスは化け物か？

それとも、装甲が強化されているか。

「敵ノーマル部隊接近。注意して下さい」

「対応が遅いな。彼我の距離とコロニーからの援護は？」

「距離は18000。長距離ミサイルで牽制を入れます」

「出来ればクラスター弾頭に換えてくれ、こちらの長距離砲撃能力をまだ見せたくはない。西に300ズレる。地平線だ。ロングレンジキャノンでも狙えるはずだ。やってくれ」

「了解しました。伝えます」

「聞いたな。東に300移動。射線をあける」

2機の返事を片耳にQ.T。

後方のアスピナコロニーからの複数の光りと、ミサイルの軌跡を確認し、またQ.T。

光学カメラの上部にあるディスクレドームの広範囲レーダーにも、後方から接近する熱源をトレースしてくれる。

砲弾が私達の横を通り過ぎ、敵ノーマル部隊へ。

敵ノーマルはGA製が過半数だが、陽動部隊の方にはオーメルの飛行型ノーマルも確認されているらしい。

閑話休題。

砲弾は真っ直ぐノーマル部隊に突き刺さる。

いくら動きの鈍いGA製でも、20k以上離れた砲撃に当たるへまはしないだろう。

しかし爆発の煽りを受けて動きが止まったり、座礁した機体もある。

そこに頭上からマイクロミサイルのスコールが降り注ぐ。

「正面から食い破る！各機、OB！」

高濃度コジマ粒子が収束し、OBが起動する。

一気にメーターが1000k/hを記録し、私達とノーマル部隊の距離を詰める。

2発の砲弾がノーマル部隊に着弾し、レーダーの熱源から5つの反応が消える。

敵ノーマル部隊は30機近く居るが、砲撃とクラスター弾頭でマトモに動ける機体は1/3以下。

そこに雷電のダブルグレネードが着弾し、最早部隊行動は取れずに各個撃破だろう。

「墜ちろオーー!!」

右腕のレーザーブレードが光刃を作る。

一体のノーマルを擦れ違い様に斬り裂き、QTで180度回転。

047ANNRが火を噴く。

弾丸は背を向けていたノーマルの左腕を吹き飛ばした。

「くっ、照準が!」

予想以上に機体重量バランスが崩れていたらしく、照準がズレてしまい、いつもならないミスをしてしまった。

操縦桿で予測微調整をしながら騙し騙しでトリガーを引く。

「らしくない失敗をしたな」

「私としたことが、調整が甘かった」

30秒かからずにノーマル部隊を全滅させたが、本来の動きが出来ていれば10秒も要らない。

アステリズムが攪乱、エヴァンジェがその援護。雷電が面制圧で終了のハズだったのに。

「次は失敗はしない。再調整も済ませた」

「すまん。実践だというのに」

「構いやしない。私は今回のミッション、コレが有効だと装備してきたまで。貴方が気に病む必要はない」

機体の再調整を終え、私は遙か彼方。

陽炎に紛れる薄いシルエットに向き直る。

「エヴァンジェよりHQへ。これよりソルディオス迎撃戦を開始する」

chapter 04 - 3 (後書き)

ジュリアスさんと隆文さんの指揮云々はフロム脳で許してくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0926x/>

ARMORED CORE with Reinforce

2011年10月19日04時08分発行